

# 『世界の読者』から読む日本文学

—ふたつの「読みのモード」の変容

河野至恩

✉ s-kono@sophia.ac.jp

Drawing on the main arguments of my recent book published in Japanese, *Sekai no dokusha ni tsutaeru to iu koto* (“Delivering Texts to the World Reader,” Kodansha gendai shinsho, 2014), I discuss two modes of reading Japanese literature: through Japanese studies (area studies) and as world literature. Over the years these modes of reading have played important roles in facilitating an understanding of Japanese literature outside Japan, but recently these two modes began to intertwine and inform each other, as the combination of the local expertise of area studies and the wider perspective of world literature suggests future possibilities of reading Japanese literature from outside Japan/Japanese. The perspectives “from the outside” are crucial in understanding the values of Japanese literature, as attested in the notion of “survival” (Überleben) discussed in Walter Benjamin’s “The Task of the Translator.”

**Keywords** world literature(世界文学), Japanese literature as world literature(世界文学としての日本文学), Japanese literature in translation(翻訳で読む日本文学)

## 1. 『世界の読者に伝えるということ』

2014年3月、講談社現代新書より『世界の読者に伝えるということ』という新書を出版した。日本の一般読者向けに、日本文学・日本文化を、日本の外の読者の視点、つまり「世界の読者」の視点から読むことの意義について論じた新書である。

本書では、世界の日本研究、特に私の比較的よく知っている北米やヨーロッパの日本研究の状況について、例えば「ポピュラーカルチャー研究」や「現代日本の批評」などの最近注目を集めているトピックなどを通し、具体的な例を交えながら論じている。さらに、日本の読者にとって「世界の日本研究から日本文学・日本文化を読む」ということ、「日本の文脈の外で日本文学を読む」ことにはどのような意義があるのか、という原理的な問題まで考察している。

これまで、日本語で、世界の日本研究の状況や、日本文学を世界の読者の視点から読むことの意義について正面から論じた一般向けの書物は少なかったのではないかと思う。この新書をあえて一般読者をターゲットに書いた理由のひとつは、最近の日本での文化状況にも関係がある。現在の日本では、日本文化の世界での受容に関心が集まっているが、その関心のありかたが、いまだに日本国内中心の視点であることが多いように思われるのだ。

たとえば、「クールジャパン」という言葉がある。ここ数年、日本で制作されたアニメやマンガなどが世界各地で人気を博しているということが日本でも注目され、日本政府も、それを単なる文化資源だけでなく、日本経済の新しい産業として支援したり、パブリック・ディプロマシーの手段として利用しようとしたり、という動きがある。しかし、日本語の出版物やマスメディアでは、まだまだその関心の重点が、実際に日本文化を受容している世界の人々の多様な生き方に向かうのではなく、「日本文化が世界で好まれている」ことや、「日本(という国や日本の人々)が世界で好かれている」という事実のみを確認するというような、自己愛的な動機を離れていないように見える。

このような文化状況のなかで、この新書では、日本の一般読者が「世界の日本研究」を通して、世界の多様な読者の視点をあえて想像することにより、世界の文化受容や社会的・文化的な状況に関心をもち、日本文化を客観的に見ることの手助けをしたいと考えた。そのようなことも、この新書の(一般読者に対する)狙いのひとつであった。

しかし、本書の核心にあるのは、私自身がアメリカの大学院で文学を学び、現在まで北米、ヨーロッパ、日本など世界の様々な地域の日本研究と関わりながら、多様な文学研究の方法や、「日本文学」への接近の方法に触れることを通して、異なる歴史を持ち、異なる方法をもつ世界各地の研究者が生産的に協力するためにはどうしたらよいか、と考えてきた、その問題意識であった。

新書が刊行されて以来、実は一番反響が大きかったのは、一般読者よりは日本文学の研究者や大学院生であった。日本文学研究でも、村上春樹や批評など近代の事例を多く

扱っているにもかかわらず、近世文学や中世文学の研究者にも学界時評で紹介されるなど反響があった。その意味で、私の持っていた問題意識は伝わったのではないかと思う。

## 2. 「ふたつのレンズ」

さて、本書では、海外での日本文学の受容を、「地域研究(日本研究)」と「世界文学」のふたつの概念を通して整理している。これらは、外国の文学作品を読む場合の二つの「読みのモード」であり、本書では「ふたつのレンズ」という言いかたをしている。世界の読者は、日本文学を「地域研究」と「世界文学」の「ふたつのレンズ」を使い分けながら読んでいる、というわけだ。

このような整理は、実は私自身がアメリカの大学院で日本文学を学んだ経験に基づいている。私が学んだアメリカのプリンストン大学の大学院では、日本文学を研究する学生は東アジア学部と比較文学部の二つの学部にも所属していた。(私は比較文学部に所属していた。)これらのふたつのグループの学生は、同じ授業を履修することが多かったものの、資格試験の内容や博士論文の条件・期待などが微妙に異なっていたし、それぞれの学部のカルチャーの違いもあった。そうした様々な環境的要件の総体が、文学作品の読み方、そのアプローチの違いを形成するのを実感した。その意味で、私が本書で提案した「ふたつのレンズ」は、文学解釈のモードでありながらも、文学研究の制度と深く関わっていることのひとつの例だといえる。

まず、「地域研究」という読みのモードについて検討する。

世界の読者が日本文学を読もうとするとき、日本語が読めるだけではなく、その文化・歴史・社会的背景を知らなければその内容を理解することができない。(それは日本国内の読者の場合も同じだが、外国の文学として学ぶ研究者や学生の場合、それらの背景知識をより意識的に学ぶ必要があるといえる。)例えばアメリカの大学生が『源氏物語』を読むためには、文学的な知識だけでなく、平安時代の法律・政治制度、宗教、貴族の家族関係などを知る必要がある。このように、「地域研究」的な読みのモードとは、文学テキストが書かれた言語・文化・歴史・社会的な背景を知り、その文脈のなかで理解しようとする読みかたを指す。

大学の制度のなかでは、これらの背景知識を総合的に学ぶことを可能にしているのが地域研究の学部である。ヨーロッパや北米では、日本文化研究は長年「地域研究」の一環として研究されることが多かった。例えばアメリカでは、比較文学部で日本文学などアジアの文学を学べる学部は最近までごく一部だった。私の知る限り、東アジアの日本文学研究でも、日本文学研究を担っているのは、日本研究の学部であることが多い。

しかし、そのような制度的な面だけでなく、「地域研究」的な読みのモードは、読者

が文学作品を読んで、その作品の舞台の国や地域の文化を学ぶ場合に有効である。例えば二葉亭四迷『其面影』の英訳、*An Adopted Husband*(光井武八郎・グレッグ・シンクレア訳)の初版(1916)序文をみると、この小説が家族制度について扱っていること、日本人を理解するためには家族制度の理解が不可欠であることを強調し、「国民の人間的な側面」について知ることをこの翻訳の目的のひとつとして挙げている<sup>1</sup>。文学史的な理解や、文体の分析よりも、文化を理解するツールとしての翻訳の役割を強調しているのだ。まだまだ翻訳の蓄積が少なく、受け手が日本文学を翻訳で読むための環境も整っていない約100年前の英語圏の状況では、翻訳者達は自らの翻訳を「日本文化・社会を知る手段」として勧めていたのだ<sup>2</sup>。

もうひとつの読みのモード、「世界文学」としての日本文学はどうか。

『世界文学とは何か?』(2003年)で、デイヴィッド・ダムロッシュ(David Damrosch)はこう書いている。「作品は二重のプロセスを経て世界文学の仲間入りをする。第一に、文学として読まれることで。第二に、発祥地の言語と文化を越えてさらに広い世界へと流通することで。(略)世界文学の領域へ入った作品は、真正さや本質を失うどころか、むしろ多くの点で豊かになりうる。このプロセスを追うためには、特定の状況において作品がどのような変容を遂げるのかをじっくりと見なければならぬ。」<sup>3</sup>

発祥地の言語や文化・社会の文脈ではなく、そこから離れて広い世界に流通したときに現れる姿を理解しようとする。これが「世界文学」的な読みかただ。発祥地の文脈から離れて、読者が多様な読みかたをする、それを認める読みのモードともいえる。

地域研究が、日本文学を「日本の」文学として読み、その文化や歴史、社会に照らして読むのに対し、世界文学のひとつとして日本文学を読むと言うことは、他の場所で書かれた様々な文学との比較対照のなかで、発祥地の文脈を越えた広い問題意識のなかで読む、ということになる。それは、大学の研究分野に限らず、日本の文脈よりも「文学作品」としての価値を重視する、より視野の広い読みかたと一般化することができる。

世界文学という問題意識は、1990年代以降、特に北米の「比較文学」の学問分野の方法論の内省が進むなかで浮上してきたが、この概念は、北米の日本文学研究の世界でも注目を集めている。(この点は後でもう少し詳しく述べる。)

1 Mitsui, Buhachiro and Gregg M. Sinclair, "Introduction" in Futabatei [Shimei] (1916 [1906]). *Sono Omokage: An Adopted Husband*. Trans. by Buhachiro Mitsui and Gregg M. Sinclair. Tokyo: Eigo-Kenkyu-Sha, 1916.

2 光井・シンクレア訳『其面影』については、以下の拙稿を参照。  
河野至恩「一九一〇年代における英語圏の日本近代文学—光井・シンクレア訳其面影をめぐって—」  
(河野至恩・村井則子編『日本文学の翻訳と流通 近代世界のネットワークへ』勉誠出版, 2018), pp.31-48.

3 デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』(秋草俊一郎他訳, 国書刊行会, 2011), pp.17-18.

### 3. ふたつのレンズから見る、日本文学研究の課題と可能性

「地域研究」「世界文学」というふたつの読みのモードは、一見対極にあるように見えるが、最近の日本文学研究をみると、地域研究としての日本研究でも世界文学的な問題意識が必要とされている一方で、世界文学的な読みにも地域研究の専門性が必要とされている。これらの「ふたつのレンズ」は、互いの長所を必要としている、といってもよい。そして、この「ふたつのレンズ」の関係性を考えることにより、現在の日本文学研究が抱える課題と、その将来の可能性が見えてくるように思う。ここでは、最近の北米の日本文学研究の現状をふまえて、それが世界の日本文学研究の課題と可能性について示唆するものを考えていきたい。

近年、北米の大学では様々な形で「地域研究」が批判され、その批判を受けて、日本研究のなかの日本文学研究のあり方も変容しつつある。

そのひとつは、文学作品を日本の歴史や文化、社会の問題に引き寄せて読むという方法の問題だ。このような読みのモードでは、ある文学作品を研究するときに、それが当時の日本社会を理解するための手段となるかどうかで評価してしまいがちだ。その結果、(ある意味で)「日本的」な作品、あるいは「日本的」と説明することの出来る作品が比較的高く評価される傾向が生まれる。

その極端な例が、日本文化論だろう。ルース・ベネディクト(Ruth Benedict)の『菊と刀』のような、日本文化の特殊性をひとつの「型」として取り出す研究は、かつては日本研究のなかでも中心的な役割を果たしたが<sup>4</sup>、現在の日本研究では、むしろ日本文化の多様性を強調するなかで、日本文化の特殊性を強調する言説はその妥当性を疑われているのが現状だろう。

日本文学研究でも、特に近代文学ではそのような日本文化論と連動するような言説はすっかり後退している。しかし、例えばポピュラーカルチャー研究や批評で、こうした日本文化論的な言説がふと顔を出すことがある。「日本のアニメ」の研究が、「アニメの日本らしさ」の研究にすり替わってしまうのだ。

地域研究的な読みのモードは、発祥地の文脈を読み解くことを重視するが、そのことで作品の意味が発祥地の文化や社会の方向に引っ張られてしまうというわけだ。だとしたら、「世界文学」という視点を導入し、もっと広い文脈に置き直すことによって、今までの日本文学の評価基準を見直し、今まで考えてもみなかった新しい文脈に接続する可能性を見いだすことができるだろう。現在の北米の日本文学研究で「世界文学」概念は注目を集めているが、「世界文学」という用語自体を使わないとしても、ここで述べたような「世界文学」的な視点からの日本文学研究の見直しは様々な研究の局面で行われていると思う。

<sup>4</sup> Benedict, Ruth. *Chrysanthemum and the Sword*. Houghton Mifflin, 1946.

現在の北米の日本研究では、柄谷行人などの批評や、ポピュラーカルチャー研究など、新しい分野での研究も進んでいる。例えば、私はジョナサン・エイブルとの共訳で東浩紀の『動物化するポストモダン』という批評書を英語に翻訳した<sup>5</sup>。この翻訳により、90年代以降の日本の批評に新たな光が当たっただけではなく、他の地域のファン研究や、ポストモダン社会論、メディア論の世界で、今までになかった読まれかたをしている。日本研究が新たな文脈にひらかれつつある、ひとつの例といえよう。

いっぽうで、地域研究的な方法で培われた、文化・歴史・社会の文脈を読み解く専門性が、今後ますます必要となるという側面もある。

世界文学という、それぞれの言語の文学を共通の枠組みのなかで扱おうとする方法では、どうしても翻訳(それも英訳)の重要性が増す。世界各地の文学作品も英訳で読めば「読んだ」ことになる、また、英訳のない作品は存在しないのも同様と見られてしまう、という批判も聞かれる。そのような状況が広がるなか、発祥地の文脈を注意深く読み解く能力は、ますます必須となっていくだろう。

たとえば、村上春樹の例を考えてみると、そのコスモポリタンなライフスタイルや、アメリカ文学に深く影響を受けた文体から、「グローバル文学」の作家として理解されることが多い。しかし、彼の作品を注意深く読むと、日本語で読むことで初めて見えてくる、日本語や日本社会の文脈に根ざした側面も存在する。例えば『神の子どもたちはみな踊る』に収録された短篇には、神戸の震災、オウム真理教のテロ事件など、1990年代における日本社会の具体的な文脈が織り込まれている。(それらを現代社会のテロや社会不安というふうに一般化する前に、日本社会における文脈や、言葉のニュアンスを注意深く検討する必要があるといえるだろう。)そのような理解を読み解く能力には、日本研究の「地域研究」的なスキルが必要とされるだろう。

このように、北米の日本研究の中の日本文学研究も、地域研究の批判を受け止めつつ、新しい可能性を開拓しつつある。

これまでの日本研究は、「日本文化」を総合的に研究することにより、研究分野の方法論の厳密性に欠ける、という批判があったように思う。しかし今後は、他の地域の専門家や、様々な研究分野との共同研究も進むなかで、「地域に根ざした知識の専門性」と「研究分野のディシプリンの専門性」を橋渡す、そのような役割が求められるのかもしれない。このような可能性は、世界各地の日本文学研究のあり方を考える上でも示唆が多いと思う。

<sup>5</sup> Azuma, Hiroki. *Otaku: Japan's Database Animals*. Trans. by Jonathan E. Abel and Shion Kono. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2009.

#### 4. 日本文学が「生き延びること」

さて、ここまで述べるなかでたびたび使った「世界の読者」や「世界の日本研究」という用語について考えたい。この新書でも、題名にもあるように「世界の読者」という言葉が中心的な役割を果たしている。しかし、この本への批判として、この「世界の読者」の「世界」とは何を指すのか、というものがあつた。「世界」といっても、この本で語られている事例は北米の日本研究に偏っていないのか。例えば、東アジアの日本研究は、異なる歴史を持ち、別の課題を抱えているのではないか。それを「世界」ということには、北米中心の世界観が隠れてはいないのか、と。

その批判は正当なものだと思う。その意味で、今回のシンポジウムのような機会を通して、本書の問題意識をさらに相対化し、北米の日本研究の「地域性」を明らかに出来れば、と思っている。

しかし、私があえて「世界」という言葉を使ったのには、日本以外の日本文学研究の意義を、日本国内の日本文学研究との関係のなかでどう位置づけ、どのような価値を見いだしていくか、という問題を考えたかったからである。

『翻訳者の課題』というエッセイで、ヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin)は、翻訳の価値について次のように述べている。

生命のさまざまな発現が、生命に対して何かを意味することなく、生命あるものと緊密に関連するのと同じく、翻訳は原作の中から生じる。しかもその生命からというより、むしろその「生き延びた生命」(Überleben)から生じる。なんとしても翻訳とは原作に後れる宿命にあり、原作が成立した時代を選び抜きの翻訳者に出会えなかった重要な作品からすれば、それら作品の、生命の持続 (Fortleben)の段階を示すのが翻訳なのであるから<sup>6</sup>。

アントワーヌ・ベルマン (Antoine Berman) の註解によれば、ベンヤミンがわざわざ括弧にいれて強調しているÜberleben という言葉は、その後に使われているFortlebenが「持続」を意味するのに対し、「生き延びる」という行為の結果、というニュアンスがあるという<sup>7</sup>。ベンヤミンは、芸術作品は翻訳 (Übersetzung) を通して、発祥地・原語での生の後に「生き延びる」といつている。それは決して比喩的な、スピリチュアルな意味ではない。彼は、この過程を、作品に内在する意味が、翻訳後の受容の歴史のなかで発現するものとして捉えている。

ベンヤミンの翻訳論は、翻訳を「受け手」へのコミュニケーションとしてではなく、

<sup>6</sup> 三ツ木道夫編訳『思想としての翻訳』(白水社、2008)、p.190。

<sup>7</sup> アントワーヌ・ベルマン『翻訳の時代 ベンヤミン「翻訳者の使命」註解』(法政大学出版局、2013)、講義ノート3を参照。

作品に内在する価値が表出するプロセスとして捉えているのである。

その意味で、日本文学の「世界の読者」を考えるとという私の本の表現には、小さな修正が必要なかもしれない。日本文学が日本の外でどう読まれ、どう研究されているかを考えることは、発祥地の外へ日本文学を「伝える」方法を考えることですらない。むしろ、世界の日本文学研究は、その全体として、個々の日本文学のテキストが「生き延びる」ことを通して内在する価値を明らかにしていく、長いプロセスの一環とはいえないだろうか。日本文学のテキストが日本語や日本の文脈で持つ価値は、このプロセスで明らかになる価値の一面でしかない。

世界の日本文学研究は、そのような意義をもつ、文学研究として本質的な営みといえるのではないだろうか。

## 参考文献

- アントワヌ・ベルマン (2013[2008]) 『翻訳の時代 ベンヤミン「翻訳者の使命」註解』、法政大学出版局。Berman, Antoine (2013[2008]) *Horiyaku no jidai: Benjamin "Horiyakusha no shimei chuukai"*. Tokyo: Hōsei daigaku shuppankyoku.
- ヴァルター・ベンヤミン (2008[1923]) 『翻訳者の課題』三ツ木道夫編訳『思想としての翻訳』、白水社、pp. 187-207。Benjamin, Walter (2008[1923]), "Hori'yaku sha no kadai." Translated and edited by Mitsugi Michio. *Shiso to shiten no horiyaku*. Hakusuisha, 2008, pp. 187-207.
- Kono, Shion. 'Senkyuhyakujyunendainikeru eigoken no nihonkindaibungaku: Mitsui Sinclair yaku Omokage wo megutte' *Nihonbungaku no honyaku to ryutsu kindaisekai no nettowakue*, ed. Kono, Shion, Murai, Noriko, Benseisyuppan, pp.31-48.
- 河野至恩 (2014) 『世界の読者に伝えるということ』、講談社現代新書。Kono, Shion. *Sekai no dokusha ni tsutaeru to iukoto*. Kodansha gendai shinsho.
- デイヴィッド・ダムロッシュ (2011) 『世界文学とは何か?』、秋草俊一郎他訳、国書刊行会。David Damrosch (2011[2003]) *Sekai bungaku towa nanika?* trans. Akikusa Shunichirō et. al. Tokyo: Kokusho kankōkai.
- Azuma, Hiroki(2009). *Otaku: Japan's Database Animals*. Trans. by Jonathan E. Abel and Shion Kono. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Benedict, Ruth(1946). *Chrysanthemum and the Sword*. Houghton Mifflin.
- Futabatei [Shimei] (1916 [1906]). *Sono Omokage: An Adopted Husband*. Trans. by Buhachiro Mitsui and Gregg M. Sinclair. Tokyo: Eigo-Kenkyu-Sha.

## 河野至恩 Shion KONO

(日本) 上智大学国際教養学部グローバル・スタディーズ研究科准教授。比較文学、日本近代文学。『世界の読者に伝えるということ』(東京：講談社現代新書、2014)、「一九一〇年代における英語圏の日本近代文学——光井・シンクレア訳『其面影』をめぐって」(河野至恩・村井則子編『日本文学の翻訳と流通 近代世界のネットワークへ』(東京：勉誠出版、2018)など。